特別講演

吉田長淑とその学統

津田進三

西洋の医方がわが国に伝えられてから二百余年ひとり外科の方術のみが行われていたとき、敢然と和蘭内科をもって江戸に業を開いた吉田長淑は、「我が邦に和蘭内治の専門家あることこれに始まる」（「日本医学史綱要」）とされながらも、今日なお十分に評価されていないようである。吉田長淑が桂川甫周および宇田川玄真の学統をついで多くの著訳書をのこし、その私塾の蘭馨堂で百数十人の門人たちを養成した功績は、もっと重視されるべきものと思われる。

吉田長淑は名は成徳、字は直心、号を駒谷といい、通称は長淑または佐公、佐侯とも称している（平野満氏）。安永八年（一七七九）幕府御先手同心馬場兵右衛門の三男として江戸に生れ、母方の祖父吉田長粛の嗣となり、幕府医官土岐長元に漢方を学び、桂川甫周に蘭学を受けた（「洋方医伝」）とされるが、土岐氏は甫周の祖母の実家であり、土岐長元は寛政一〇年の「蘭学者相撲見立番付」にみえる土岐寛庵のことと思われ（「寛政重修諸家譜」）、養父の吉田長粛もまた桂川門下の和蘭外科医といわれる（関場不二彦氏）ので、長淑は早くから蘭学に志したもののようである。

寛政四年（一七九二）宇田川玄隨が「西説内科撰要」を訳述するや、長淑は和蘭内科をもって立つ決心をしたが、既に早く延宝二年（一六七四）テン・ライネによって紹介されていた西洋内科を改めて人々に知らしめたのは吉雄耕牛であって（小川鼎三氏、酒井シヅ氏）、合田求吾の「紅毛医言」は宝暦一二年（一七六二）の耕牛の講義録であるが、その後も西洋内

科の普及がおくれた最大の原因は使用する薬剤の入手難であった。

このため長淑は甫周のすすめでレメリイの薬物事典を考究して「和蘭薬撰」や「遠西薬圃綱目」を訳述し、遂には「蘭薬鏡原」五〇巻として集大成したが（宗田一氏）、宇田川玄隨の「遠西名物考」に校定者として長淑が名をつらねるのは恐らくレメリイを担当したため（平野満氏）と思われる。

長淑は江戸波留麻を三たび写したといわれ（岡崎桂一郎氏）、その学力は寛政八年の「蘭学者芝居見立番付」や同一〇年の「相撲見立番付」にも既に認められ、松平定信のドドネウスの翻訳事業にも大槻玄沢の推挙で参加している（杉本つとむ氏）。

享和二年（一八〇二）長淑は宇田川玄真の弟として掛川藩医倉持宗寿の養子となり、文化六年秋再び吉田姓に復したが（「宇田川家記録」）、舟木茂夫氏のご好意による掛川藩の「御家中家譜抜書」では「同（文化）七午年三月五日願ニ付隠居実方江引取」となっている。

文化七年（一八一〇）長淑は加賀藩医となったが、これよりさき江戸中橋上槇町で和蘭内科を標榜して業を開いている。このため物議騒然となり師の甫周から破門された（「皇国名医伝」）というが、確証はないようである。

文化一一年（一八一四）長淑は英人ヒュクサムの書を訳して「泰西熱病論」を刊行した。ライデン学統のブールハーヴェを祖述したヒュクサムの熱病理論（阿知波五郎氏）をよく把握して「二原三因」の論を進めているが、入手困難な薬剤には代用薬を詳述するなど実用の書となっており、彼の製薬法はわが国製薬史に大きな影響を与えた（宗田一氏）といわれ、また本書により刺絡瀉血が普及した（「日本医学史」）ということである。

文政七年（一八二四）長淑は藩主前田斉広の急病で金沢に赴き、八月一〇日四六歳をもって金沢で死去した。墓は金沢の棟岳寺に、碑は江戸の養源寺にそれぞれつくられている。

吉田長淑の著訳書は平野満氏のご努力により「泰西五診精要」「増補海上備要」「蒲剛製剤篇」など二〇数点が知られて

おり、また渡辺崋山画ヒポクラテス像への蘭文の賛（緒方富雄氏）などがある。

吉田長淑の蘭馨堂塾に学ぶものはすこぶる多く、「門人譜」に一九人、「門人籍」には一三五人の姓名が記されているが（吉川芳秋氏）、なかでも高野長英、足立長雋、桂川甫賢、湊長安、小関三英などは特に高名である。一方蘭馨堂では、ほかの蘭学塾とも自由に交流があったようで、たとえば南小柿甫祐、十束隆圭、武井周朔その他は桂川甫周の門人であり、安岡文竜、小川廉次などは宇田川玄真の、湊長安は大槻玄沢の、藤田長禎、遠藤良蔵などは小森桃塢のそれぞれ門人でもあることは興味深いことである。

吉田長淑の内科や薬物の研究は、湊長安「泰西内科集要」、小関三英「泰西内科集成」、大高元哲「新訳蒲剛先生医方集要」、松田東英「眼科新書薬剤篇」などにひきつがれたが、別に足立長雋「産科礎」、衣関順庵「眼目明弁」、高野長英「医原枢要」など各分科における先駆者を出したのも吉田長淑の功績と思われる。